

今回から再び個々のアイヌ語地名の地名解を検討する。前回の予告のように、シケウシナイ(sike-us-nay)荷物を背負い・しつけている・川↓「この川の所で丸木舟から荷物を陸揚げして、荷物を背負つていく所」の意味)から検討する。

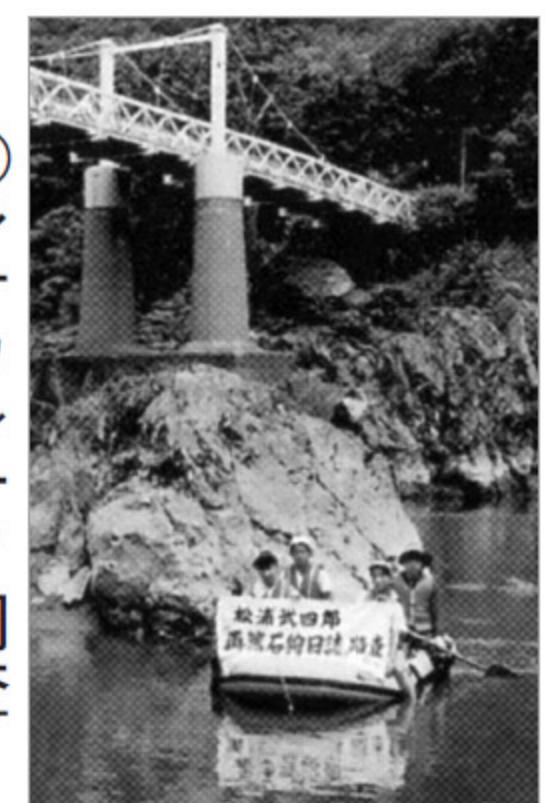
久しぶりなのと、初めての読者のために、掲載図②の「現・神居古潭」の地図を参照して、往時のアイヌ時代の力ムイコタンについて、重要地名・事項を含めて概説させていただく。

アイヌ時代に上川に入るのは、丸木舟で石狩川を遡り、現在の神居大橋の下流のパラモイ(para-moy 広い・湾)まで来て、ひしから上流は激流のため、丸木舟では上れないのと、ここで丸木舟から荷物を陸揚げし、荷物を背負い、約三キロメートル上流のハルシナイ

旭川のアイヌ語地名研究

(61)

高橋 基



③シケウシナイ調査

一 旭川のカムイコタン 18

十三年三月にカムイコタンを調査した永田方正が、北海道庁から明治二十四年に出版した『北海道蝦夷語地名

書、聖典とまで言われているものでもある。永田方正は、この地名を右の書で初めて採録して、次のように記録した。(ウシユは永田独自の表記)「シケウシナイ(shike-us-nai 荷ひ川)」—此の川より荷物を陸揚げして荷ひ行くを以て名づく。樺戸監獄署神居古丹派出所ある処。」

解』で、初めて採録したアイヌ語地名である。この書は、アイヌ語地名を愛惜した初代北海道庁長官の岩村通俊と二代目長官の永山武四郎との二人の命を受けて著述したと、その「緒言」に記載されたように、図の左上の「レーコロピイラ(re-kor-puyra)」は、先の永田方正著の『北海道蝦夷語地名解』によっている。ただ、本連載の(41)でも指摘したように、図の左上の「レーコロピイラ(re-kor-puyra)」と持つ・激流→有名な激流の意味)は、永田方正は、ハルシナイ(春志内)よりも上流にある激流と書いている。ここは、激流を永田方正は、カムイウツカ(kamui-utka 神・神・村→神のいらしゃる所)とアイヌの人たちは尊称していたのである。

さて、今回のシケウシナイは、明治二十二年三月にカムイコタンを調査した永田方正が、北海道庁から明治二十四年に出版した『北海道蝦夷語地名解』に記載されたものである。永田方正は、この地名を右の書で初めて採録して、次のように記録した。(ウシユは永田独自の表記)「シケウシユナイ(shike-us-nai 荷ひ川)」と書いている。しかも『北海道蝦夷語地名解』に記載されたものであるが、この地図には、位置が誤って記載されたのである。他方、永田方正は、

シケウシユナイは、掲載図②の「ポロレブシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖)についている・もの=岩)の大岩より上流にあると記録し、掲載図①でもそのようになっている。

写真③のシケウシナイ調査は、昭和六年に四人乗りゴムボートで、永田方正がシケウシナイが、ポロレブシペより上流にあるとしたので、丸木舟の運航が可能かを調査した時のものである。その結果も含めて次回に報告する。(アイヌ語地名研究会幹事)

①明治二十年製版
『北海道仮製五万分一図』

②現・神居古潭

永田方正が初めて採録したシケウシユナイが、これも上川郡初めての五万分一図である、掲載図①の明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』に記載されている。この地図はご覧のよう

に川名や地名は片假名書きのアイヌ語地名である。この書は、アイヌ語地名を愛惜した初代北海道庁長官の岩村通俊と二代目長官の永山武四郎との二人の命を受けて著述したと、その「緒言」に記載されたように、図の左上の「レーコロピイラ(re-kor-puyra)」と持つ・激流→有名な激流の意味)は、永田方正は、ハルシナイ(春志内)よりも上流にある激流と書いている。永田方正は、この地名を右の書で初めて採録して、次のように記録した。(ウシユは永田独自の表記)「シケウシユナイ(shike-us-nai 荷ひ川)」と書いている。しかも『北海道蝦夷語地名解』に記載されたものであるが、この地図には、位置が誤って記載されたのである。他方、永田方正は、シケウシユナイは、掲載図②の「ポロレブシペ(poro-rep-us-pe 大きい・沖)についている・もの=岩)の大岩より上流にあると記録し、掲載図①でもそのようになっている。

写真③のシケウシナイ調査は、昭和六年に四人乗りゴムボートで、永田方正がシケウシナイが、ポロレブシペより上流にあるとしたので、丸木舟の運航が可能かを調査した時のものである。その結果も含めて次回に報告する。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します